総　説

感冒の漢方療法

浜松赤十字病院　小児科
西村　甲

Key words
感冒、漢方療法

はじめに

一般外来において最も多い疾患は，感冒を始めとして急性ウイルス性感染症である．感冒に対して現代西洋医学では，症状に応じて感冒薬を組み合わせる，面倒だと思えば総合感冒薬にしてしまう，細菌感染が疑われれば抗生剤を追加する，発熱には解熱剤を投与するというようにある程度パターン化された治療になっている．このような治療においては抗体産生の過程における生体反応の現れとしての発熱を解熱剤により強制的に解熱させることには疑問を感じるし，患者個人の胃腸の強弱を考慮せず一律に解熱剤を投与することは避けるべき注意点といえる．一方，漢方療法は生体の自己反応に逆らわず，自己の治癒能力を促すという点でも望ましい治療手段と考える．この場合，患者各個人の体質を考慮して外見上の症状は同じであっても投与される方剤は異なってくるのである．逆に考えると，患者の背景，体質を十分に把握していないと投与した方剤の効果が現れないという問題点もある．本稿では，感冒に対する治療を全身の発熱症状，関節筋肉および神経の痛みを主にするものの治療，上気道の炎症（鼻炎，咽頭炎，扁桃腺炎など）症状からみた治療，その他に分類し，実際の漢方方剤の使用法について概説する．

1．全身的発熱症状，関節筋肉神経痛を主とするものの治療（表1－3）

1）表裏，寒熱，虚実の分類と代表的薬剤

全身的な発熱症状は発熱，悪寒，皮膚の知覚過敏，頭痛，発汗などが主で，漢方医学的には表の部位における症状即ち表証になる．関節痛，筋肉痛，神経痛なども同様に表証である．従って感冒の治療は表に熱を帯びた（漢方医学ではこれに太陽病という病型の名を与えている）ものに対する治療が中心になる．

表熱は更に虚と実に分類されて表実熱と表虚熱とになる．表実熱の証では，頭部，項背，四肢などに発熱症状があって，実しているために自然発汗がない．脈は病が表にあれば浮になり，実すれば緊になり，熱があれば数になるから，浮緊数を

表1　感冒(表証)の大分類と代表的漢方薬

表実熱	桂麻剤	麻黄湯 葛根湯 大青龍湯 麻黄加朮湯 桂枝麻黄各半湯 桂枝二越婢一湯
表虚熱	桂枝剤	桂枝湯 防己黄耆湯 桂枝加附子湯 桂枝加黄耆湯 桂枝加葛根湯 桂枝人参湯 桂枝附子湯 甘草附子湯 朮附湯* 白朮附子湯*
表虚寒	附子剤	麻黄附子細辛湯 麻黄甘草附子湯 附子湯 四逆湯 香蘇散 真武湯

* 桂枝を含まないが，表虚熱証に投与される．

表2　全身症状呈する感冒における症状からみた漢方薬の選択

熱がるもの，赤い顔	(熱証)	桂麻剤，桂枝剤
寒がるもの，蒼い顔	(寒証)	附子剤
頭痛を主とするもの	実熱証	麻黄湯
	虚熱証	桂枝湯
		防已黄耆湯
		桂枝加黄耆湯
		桂枝人参湯
	虚寒証	麻黄附子細辛湯
		麻黄甘草附子湯
関節筋肉神経痛を主とするもの	実熱証	麻黄加朮湯
	虚熱証	桂枝附子湯
		甘草附子湯
		白朮附子湯
		朮附湯
	虚寒証	附子湯
筋肉の緊張を主とするもの	実熱証	項背部緊張なら葛根湯
	虚熱証	項背部緊張なら桂枝加葛根湯
		四肢の緊張なら桂枝加附子湯
自覚症状の少ないもの	虚寒証	四逆湯
		香蘇散
		真武湯

呈することになる．病は表だけであるから腹部には変化がなく，腹診上特記すべき所見を認めがたい．その他舌も変化がなく，小便の色も通常である．このような場合には桂枝と麻黄が入った所謂桂麻剤で発汗すべきである．一方，表虚熱の証では，表に発熱症状があるが，虚しているから自然発汗がある．脈は，虚では弱となるため浮弱数を呈することになる．表以外の部位に変化がないのは，表実熱と同様である．このような場合には桂枝だけで麻黄が入らない桂枝剤を用いて発汗すべきである．

以上のように悪寒，皮膚の知覚過敏を伴うこともあるが，発熱と自覚的な発熱感を主とする熱証がある一方で，寒証が存在する．すなわち，実際に接してみると発熱はしていても自覚的には熱感はほとんどなく割合平気でいるもの，全然熱くなくただ寒気だけするというものである．概して冷え性の体質の人に認められることが多い．症状としては熱発，頭痛，関節，筋肉，神経などの疼痛等，熱証の場合と変わりはないが，ただ自然発汗がないこと，頭，手足に冷える感じがすること，概して貧血性であることなどが異なる．脈は熱証に対して矛盾した所見を呈する．表熱証なら浮数であるが，寒証だと沈数になったり遅になったりする．脈からこのような矛盾所見を見出すことによって熱発はしているが，熱証ではなく寒証であることが判断されるのである．このように表寒の状態を漢方医学では少陰病と称している．

表寒証でも表熱証と同様に虚実があるべきであるが，日常遭遇するのは表虚寒証だけである．もっともその中でも寒が著明な場合と虚寒ともに著明な場合とがあるが，普通の臨床上はそこまで峻別しなくても構わない．寒に対しては温める治療をする．温めるには附子，乾姜等の温剤を使用する．附子の入った処方には麻黄附子細辛湯，四逆湯，香蘇散，真武湯などがある．

以上は定型的なタイプの二大別であって，現実にはもっと複雑な様相を呈するものである．しかし，先ずこの寒熱の二大別を理解することが重要である．そして，熱いタイプには桂麻剤ないし桂

表3　全身症状を呈する感冒における脈診所見からみた漢方薬の選択

浮緊数	麻黄湯 葛根湯 麻黄加朮湯
浮弱数	桂枝湯 防已黄耆湯 桂枝加葛根湯 桂枝人参湯 桂枝加附子湯 桂枝附子湯 朮附湯 真武湯 甘草附子湯 白朮附子湯
沈数	麻黄附子細辛湯 麻黄甘草附子湯 四逆湯 香蘇散 附子湯
沈遅	四逆湯

枝剤，寒いタイプには附子剤というように漢方薬の選別を行うのである．

2）桂麻剤

桂麻剤でよく使用されるものは，麻黄湯，葛根湯などである．これらの方剤の投与目標は以下の通りである．頭痛または頭痛に腰痛，関節痛，筋肉痛などの疼痛を伴えば麻黄湯を，僧帽筋部（項，肩）の緊張またはそれと頭痛を伴えば葛根湯を投与する．

疼痛は普通の感冒では割合に起こりにくいから，普通の感冒で麻黄湯を使う機会は少ないことになる．しかし，流感ではしばしば麻黄湯の証が現れることは当然である．麻黄湯は疼痛その他の自覚症が少ない時に脈が浮緊数であることだけを目標に使うことがある．もし自覚症が少ない時に脈が浮弱数なら真武湯になる．麻黄湯の証で煩躁（もだえて体をバタバタさせる），口渇が加わった状態であれば，大青龍湯を使う．なお，麻黄湯は頭痛を主症として，さらに他部の疼痛を伴っているのであるが，もし頭痛がないかあるいは極軽微で，他部の疼痛が主症になっている時は麻黄加朮湯にする．麻黄湯は熱だが，その裏が寒の場合には麻黄附子細辛湯で寒熱が対照的になる．体全体は暑く汗ばんでいるが，肩の一部だけ寒気があり，脈がやや緊なら，桂枝麻黄各半湯，桂枝二越婢一湯である．

葛根湯は汗が出ない場合であるが，もし汗が出ていれば桂枝加葛根湯になる．これは虚実の対照である．

3）桂枝剤

桂枝剤では原則的には汗が出る．その程度は様々である．脈は共通的に浮弱数である．使用される桂枝剤とその投与目標は以下の通りである．頭痛あるいは逆上せる（上衝）なら桂枝湯，頭痛があって汗が多く出るなら防已黄耆湯，頭痛があって汗が非常に多く出るなら桂枝加附子湯や桂枝加黄耆湯，頭痛よりも項肩部が緊張してこるものは桂枝加葛根湯，頭痛だけで他に症状がないが，胃腸が弱く下利しがちのものあるいは冷え性のものなら桂枝人参湯である．

桂枝湯は割合に使う機会が少なく，桂枝湯らしく思えてもむしろ防已黄耆湯が効くことの方が多い．それは恐らく日本の風土においては湿気が多いから防已黄耆湯の証が現れやすいためと思われる．感冒で汗をかきやすい場合には，防已黄耆湯を使う機会が多くなる．

汗が非常に多く出ているなら，桂枝加附子湯や桂枝加黄耆湯を考えるべきである．桂枝加附子湯証は表虚のために汗が漏れて筋肉が攣縮して，手足を動かすのが困難となり，尿利が減少するが，頭痛および悪寒は著明ではない．本方は元来発汗剤を使って発汗過多に陥り，排尿困難，四肢屈伸しがたいものを治す処方であるが，表虚により脱汗や悪風（風にあたると気持ちが悪いこと）も起こるのであるから，発汗剤の使用の有無に拘泥せず，非常に汗が多く出るもの，悪風するもので脈が浮弱数のものに使うとよい．排尿困難や四肢がつれるようなぎこちない感じがするという症状があれば本方証であることは一層確実になるが，なくても構わない．桂枝加黄耆湯証は表虚とともに

表に水分の停滞がある場合で，腰がだるく，体をうごかすのが億劫である．桂枝加附子湯も桂枝加黄耆湯も体質的に著しく虚証の人に適するので，実際の使用機会は多くない．

桂枝加附子湯に似ているが，処方の内容や分量が異なるものがある．桂枝加附子湯が脱汗知覚障害筋拘攣を主とするのに対し，桂枝附子湯は疼痛を主として，小便不利のものに適する．脈はともに浮弱数のため，脈では両者を区別し難い．桂枝附子湯の証にみられる疼痛は筋肉，関節，神経のどこに生じてもよい．もし関節が主として小便不利であれば甘草附子湯になる．もし脈が沈なら附子湯になる．朮附湯は桂枝附子去桂加朮湯，一名白朮附子湯と生薬の構成は同じであるが，全体の分量が多くなっている．白朮附子湯は桂枝附子湯の証で大便が硬く，小便自利するものに使うが，朮附湯は指示が風虚，頭重，眩苦極まり，食味を知らずとなっている．つまり，朮附湯には疼痛には関係のない適応症状のあることが知られる．実際に頭が重い，目がまぶしい，しかめ面をしている，目が重いような引き締まるような感じがする，食が進まないなどの症状が同時にあることは稀なことではない．脈は浮弱数である．食欲不振というと直ぐに柴胡剤などを考えやすいが，実際にはそう拘ってはいけない．また朮附湯の指示の終わりに薬能として暖肌，補中，精気を益すとあるのも非常に参考になる．つまり，感冒は体が疲れて寒さに当たったときに招きやすいのであるから，そういう前提条件を除去しておけば感冒にも罹りにくいわけである．従って，朮附湯を感冒や流感の予防に使うのは合理的なことといえる．実証の人ならむしろ排便を規則正しくするような瀉下剤の方が有効である．

桂枝加葛根湯は前述したように葛根湯と虚実が対照的で，脈の緊弱，汗の有無によって区別される．しかし，必ずしも汗が出ていなくても脈浮弱で項背部が緊張し，あるいは緊張感すなわちはる，こる感じがあれば桂枝加葛根湯を使っても良い．要するに目の付け所は表虚である．表虚によって汗も出るし脈も浮弱になることを了解しておけばよい．

桂枝人参湯は，傷寒論で利下止まず心下痞硬，表裏解せず，と指示されている．このような症状を起こす根本的状態は表熱裏寒である．この場合の表は表実ではなく表虚である．裏虚寒は症状として現れないとしても体質的に潜在しているものと考えておけばよい．もし症状として現れるとすれば，下利，心下痞硬，食欲不振，尿利増加，足の冷えなどである．このような症状があればなおさら桂枝人参湯の証であることが確かめられる．桂枝人参湯を感冒に使う目標は脈浮弱数，頭痛，そして体質的に冷え性で胃腸の弱いものである．悪寒，咳，汗などを認めないときに使うことにする．桂枝湯との区別においては，桂枝湯は逆上せる感があり，汗が出て足は冷えないなどの点に注意すればよい．

4）附子剤

表虚寒証に使用される附子剤は投与に際して大体次のように目標を定めると良い．寒気と頭痛が主なときは麻黄附子細辛湯，その程度が軽ければ麻黄甘草附子湯，疼痛が主なときは附子湯，手足が冷えれば四逆湯，発熱，悪寒は強くなく精神神経症状を伴えば香蘇散，自覚的に何とも無ければ真武湯である．

麻黄附子細辛湯は普通の感冒に使うことは比較的少ない．何故なら麻黄附子細辛湯証は概ね悪寒を伴うもので，その悪寒は普通の感冒よりも流感のときの方が多く現れるからである．普通の感冒の場合には，そう激しい悪寒はせずに，ただぞくぞくする，寒くて仕方が無いという程度である．老人や冷え性の人では本方の証を現すことがある．本方証は冷えるのが手足だけというのではなく，（手足だけならむしろ桂枝人参湯や四逆湯を考える）全身的に寒いか，あるいは特に頭が冷えると訴えるのが特徴である．このような証の老人などは頭に頭巾をかぶったり布で頭を包んだりしている．熱があるからといって氷嚢や濡れ手ぬぐいを頭にのせると却って気持ちが悪くなる．頭痛は殆ど必発といってもよいが，時には重い位の訴えであまり著明でないこともある．鼻汁を認めることも多いし，時には喘息を発症していることもある．麻黄附子細辛湯証の脈は沈数である．緊張はそれほど弱くないことが多い．即ち沈だけで沈弱でな

いことが普通である．

麻黄甘草附子湯は麻黄附子細辛湯より症状が軽いものに投与される．両者の構成生薬の差は，甘草と細辛の入れ替えだけである．しかし，この点について甘草と細辛の薬能の差とそれによって全体的にどんな違いを生じてくるかの二つの面から比較することは両漢方薬の異なる効能の理解に役立つ．甘草の薬能が気道を緩めるとみれば咽痛などを治すことになり，補剤とみれば麻黄附子の峻作用を緩和し全体的に症状の緩和なものに使うと解釈できる．事実，麻黄甘草附子湯は寒証で悪寒頭痛などもあるが，咽痛を伴うもの，また麻黄附子細辛湯に比して全身的に症状の軽いものによいのである．これに対して細辛は表寒を治すとともに肺寒を温める．さらに麻黄のように水を逐う作用があり，麻黄が裏水を表に通達するのに対して細辛は温める，というように機序は異なるが，両者が合して強く停水を駆除する．従って麻黄附子細辛湯は表寒が強度であるときと肺寒のときに，一方麻黄甘草附子湯は表寒が軽いときと肺までいかずに咽喉部に止まるときに使うべき処方だといえる．麻黄甘草附子湯証の脈も沈数である．従って脈だけでは麻黄附子細辛湯との区別は困難なために，他の症状によって判別しなければならない．

附子湯は，発熱とともに背中だけがぞくぞくと寒気があり，手足が冷え，身体関節が痛むものに使う．普通，咳，頭痛を伴わない．熱がなくても背筋がぞくぞくすることと筋肉痛，関節痛を目標にして投与することがある．本方の証は表の水血が凝滞して身体に疼痛が生じ，さらに凝滞が進行することにより内部の水血も不順となり関節痛に至るものといえる．心下悸，心下痞硬を伴うこともあるが，このような腹証を認めないこともあるため，あまり拘泥すべきではない．本方証の脈は沈である．

四逆湯は本来裏寒に使う処方であるが，裏寒が表寒に至り，表裏ともに寒即ち全身的な寒になり，表の仮熱症状を呈すれば，感冒に対して投与されうるのである．傷寒論には病発熱頭痛，脈反って沈，また，脈浮にして遅，表熱裏寒，下利清穀と指示している．この内，頭痛や下利清穀は必発症状と考えなくてよい．普通の感冒では発熱があり手足が冷えるという症状があれば本方を使う．そして咳，鼻汁などの他の症状がないときに使うことにする．ただし，脈は是非沈か遅でなければならない．発熱頭痛は表の症状で，表なら脈は浮になるべきである．然るに沈という矛盾した脈を呈するのはこの発熱が実熱ではなくて本当は寒による仮熱のためである．遅も同様で熱なら数になるはずであるが，本態が寒だから寒の脈として遅を呈するのである．このように矛盾している脈によって症状と症状を起こす状態との間の真仮の関係を明らかにしていくことができる．症状だけで正確に判定しようとすることには無理がある．熱があっても熱がらない，赤い顔をしていないことで大体寒証だと予想して手足が著しく冷えることで寒証を確かめていけばよい．

香蘇散は表虚寒証のうち胃腸が極めて弱く，精神神経症状を呈するものに投与される．胃腸虚弱は表虚熱の桂枝湯証のものより，さらに強く認められる．無気力感，倦怠感，軽い悪風，頭痛などが現れる程度で，高熱や悪寒は顕著ではない．また，不安，不眠，抑鬱気分などの精神神経症状を伴うことが多い．暗い感じがして物静かなもの，虚弱な老人にこの証が認められることがある．本方証の脈は沈数である．

真武湯になると処方の組成から考えて虚と寒と水との三つの条件がある．この条件が組み合わされた症状を呈し，特にその中の一つ二つが著明に現れるのである．感冒のときには虚が最も著明である．症状からいうと体質的に虚証の人で，高熱があっても自覚的に熱感がなく，平気な顔をしており，あるいは反って蒼い顔をしている．その他，頭痛，関節筋肉痛等がない．要するに自覚的には何でもないということが多い．この，何処もどうでもないということが実は虚のためであって，虚だからおとなしく，静かなのであると考えればよい．ただ，体が重だるい，軽い咳があるということもある．それは真武湯の証の中に含まれるから差し支えない．真武湯証の脈はこの場合浮弱のことが多く，稀に沈弱のこともある．

2．上気道の炎症症状からみた治療

上気道の炎症を主とするものについて述べる．このグループで起こる症状としては，鼻炎に伴う鼻汁，鼻閉，咽頭炎に伴う咽痛，咳などとこれら以外には時に食欲不振などの胃腸症状が起こる．

1）鼻汁，鼻閉

急性鼻炎に対しては発熱症状がある間は，特別な処方を使用する，或いは特に薬物を加減する必要はない．前記の処方を使っておけばよい．傷寒論の桂枝湯の指示条に鼻鳴とあり，それは鼻の方からいえば鼻炎症状であって，鼻炎も桂枝湯証の内に含まれるのである．葛根湯においても鼻炎を治しうることは容易に推定されるし，事実葛根湯を使うと発熱頭痛肩こりなどが治るとともに鼻炎も治っていくのである．なお，葛根湯は蓄膿症にもしばしば使うことを思い合わせるとよい．葛根湯や麻黄湯などは構成生薬である麻黄の効果の他，実証であることも関係して，大体鼻がつまるときに充血粘膜腫脹を抑制する作用がある．乳児の感冒で鼻がつまって息が苦しいときに麻黄湯を使うこともこのような作用を応用したものである．漢方医学的には鼻がつまれば息が苦しくなり，息が苦しいのは喘である．故に喘に使う麻黄湯は鼻塞に使うという論法をとっている．葛根湯や麻黄湯の証は濃い鼻水が出るのが原則である．何故なら分泌物が濃いことは実証であるからである．もし，鼻汁が薄ければ虚証か肺寒があるか，水証である．虚と寒と水とは互いに関係しあうから切り離して考えるよりも互いに関係しあい，その内どれかに特に顕著に症状として現れるとみておいた方がよいであろう．麻黄が入った処方でも附子や乾姜が入っていれば，薄い鼻水に使うことになり，例えば麻黄附子細辛湯や小青龍湯が相当する．

全身の発熱症状が軽いあるいはない場合には，甘草乾姜湯，人参湯，柴胡桂枝乾姜湯，苓甘姜味辛夏仁湯を使う．甘草乾姜湯証は鼻汁以外には特別症状がなく，脈は沈弱である．人参湯証は胃腸症状があり，胃部がつかえ，足が冷え，脈は沈弱である．柴胡桂枝乾姜湯，苓甘姜味辛夏仁湯については咳嗽の項を参照する．

2）咽喉痛

咽頭炎，喉頭炎，扁桃腺炎などを起こしたときに，発熱，悪寒，頭痛などの表熱症状を伴うタイプでは，鼻炎の対処法と同様で，全身症状に対する処方を考えればよい．咽頭が痛むと葛根湯や小柴胡湯に桔梗や石膏を加えて使う人がいるが，必ずしもそうする必要はない．咽痛で始まる感冒には，桂枝麻黄各半湯，桂枝二越婢一湯，麻黄附子細辛湯が適することが多い．

一方，頭痛，悪寒などの表熱症状がなくてただ咽が痛むだけのタイプがある．熱はあってもなくても構わない．大体咽は少陰の部位だから少陰病の治方を主に考えればよい．少陰病の咽痛に使う処方を以下に示す．甘草湯は極軽い咽痛，咳嗽または咽の通りが悪い，窮屈に感じる，声が枯れるというようなときに使う緩和剤である．桔梗湯は咽痛がやや著明なとき，或いは咳と膿性の濃い痰を伴うときに使う．半夏湯は咽痛が著明なときに使う．半夏苦酒湯は咽痛ばかりでなく咽に瘡（潰瘍，厚い苔を指す）を生じたときに使う．

3）咳嗽（表4，5）

咳嗽においても主体となる症状に応じて治療を決定する．咳は通常，上気道即ち咽の炎症を伴うものであるから，咳嗽の治療は咽痛の治療と共通する所が多くなる．また，鼻汁の症状の方が強い，あるいは全身的な発熱症状が主体のこともある．このような場合には，前述した処方を使用すればよいわけである．しかし，実際問題となるとそう簡単に割り切ってしまうことはできない．

上気道炎の症状の中でも咳嗽を主とする患者は様々な背景をもっているため，特に状況に応じた治療が求められる．喘息や肺結核の患者などが風邪をひいて咳が激しくなることもあるし，熱がとれても咳だけが残って悩まされる患者もある（感冒に典型的な表証を示す病位が変化する）．また，全身の発熱症状が改善せず，咳が出始めて次第に悪化していくこともある．このため，咳の改善を主眼にした療法が重要になってくるのである．しかも咳は何でもないようであって時になかなか工夫を要することがある．次に主な療法を示す．

表4　咳嗽を呈する感冒における症状からみた漢方薬の選択

発熱症状が残存	小青龍湯 桂枝加厚朴杏仁湯 小柴胡湯（胃腸障害有） 柴胡桂枝湯（胃腸障害有） 柴胡桂枝乾姜湯（胃腸障害有） 参蘇飲（胃腸障害有）
強い咳	小陥胸湯（実証，痰の切れが悪く咳のときに胸に響く） 麦門冬湯（やや虚証，空咳） 苓甘姜味辛夏仁湯（虚証，湿った咳）
軽い咳	柴胡剤 参蘇飲 半夏厚朴湯
薄い痰が多量	小青龍湯 苓甘姜味辛夏仁湯 半夏厚朴湯*
薄い痰が少量	柴胡桂枝乾姜湯 参蘇飲 麦門冬湯 半夏厚朴湯*
濃い痰	小柴胡湯 柴胡桂枝湯 小陥胸湯

* 痰の量は多いことも少ないこともある．

小青龍湯は普通感冒だけで使うことは少なく，気管支炎を発症したときに最も多く使う処方である．普通の上気道炎だけの感冒でも喘息持ちの人や風邪を引いて喘息を併発してきたようなものには小青龍湯を使う機会がしばしばある．これを使う目標として二つの場合がある．一つは発熱と頭痛または悪寒などの表熱症状を伴い，脈が浮数になっているとき，もう一つは発熱症状がない場合でも脈が浮のときである．両方の場合に共通な点は咳が湿性で多少なりとも喘鳴を伴い，痰は薄くて割合量が多く，口渇，尿利などには格別な変化がないことである．小青龍湯は喘咳を主として表熱症状を副にするが，主副反対で表熱症状が主なら桂枝加厚朴杏仁湯にする．この証においても脈は浮数だが弱である．小青龍湯証の脈の緊張は普通である．

小柴胡湯は様々な症状に対して使用されうるものであり，感冒といえども，その適応を咳嗽という一面のみでとらえることは困難である．まず，感冒全般について適応を整理して，次に咳嗽に関して述べることにする．

感冒に小柴胡湯を使う場合には三つのタイプがある．第一は発病後数日を経て解熱しない場合である．その間にいろいろ薬を使ったか否かは別にして，とにかく熱が下がらず舌が白くなり，食欲が進まず，あるいは嘔気があることもあり，あるいは咳が止まらないこともある．胸脇苦満すなわち胸が重苦しいとか肋骨弓下部がふさがっているような感じがするというときに小柴胡湯を使う．即ち胃腸症状を併発してきた場合である．なお，解熱剤を濫用して胃腸障害，肝機能障害を起こして本方証を現すものが相当多い．第二はリンパ腺炎を起こした場合である．頸部リンパ腺炎，扁桃腺炎も含めてよい．その時は弛張熱を認めることが多く，時には悪寒と発熱とが交互に起こる所謂往来寒熱を呈することもある．こういう時にも胃腸症状を伴えば小柴胡湯証が確認されるのである．第三は素質的に小柴胡湯の証を起こしやすい条件

表5　咳嗽を呈する感冒における脈診所見からみた漢方薬の選択

浮	小青龍湯 桂枝加厚朴杏仁湯 柴胡桂枝湯 小陥胸湯 麦門冬湯
沈	柴胡桂枝乾姜湯 苓甘姜味辛夏仁湯 参蘇飲 半夏厚朴湯

があるものである．この素質は肉体的にも精神的にも認められるものである．代表的なものとして腺病質が挙げられる．また，既に感冒以外の疾患をもつものがたまたま感冒にかかった場合にも，その病気が柴胡剤の証を起こしやすいもの（例えば肺結核）であるなら，感冒に誘発されて小柴胡湯証を現してくることがある．このように，小柴胡湯は原則的には発病当初に使うことはないのである．

小柴胡湯証の咳や痰は普通の程度でそう著明な特徴はないが，痰が濃い方で楽に喀出しにくい傾向がある．痰が少なくて軽い咳しか出ないことが多く，非常に激しい咳はない．咳と痰は小柴胡湯にとっては客証である．脈は病状によって浮のことも沈のこともある．小柴胡湯も頭痛を治しうるが，四肢身体の疼痛は治し得ない．もし頭痛や四肢身体の疼痛が著明で，しかも小柴胡湯の基本症状があるようなら柴胡桂枝湯を使うとよい．小柴胡湯証のようだが，もっと虚しているものなら柴胡桂枝乾姜湯を使う．虚していることは全身状態が虚性体質であるか，体力が消耗しているかでも大体見当がつき，脈が弱く細くなっていることで確かめられる．なお柴胡桂枝乾姜湯証なら口渇，頭汗または盗汗，腹動などがあることを確かめると良い．

小陥胸湯はあまり高熱でなく，しかも頭痛悪寒等が既に取れて来た時期に，粘調で喀出困難な痰を出し，喀出するときに胸や胸元に響いて痛むものに適する．脈は原則的に浮滑であるが，それに拘泥しなくてもよい．また著しい実証や虚証でない限り，症状を目当てに使ってよい．腹診上では心下部が緊張し圧痛を認めることが多い．心下部が軟弱なら本方の適応ではない．

参蘇飲は平素より胃腸が虚弱で，感冒が長引いて軽度の咳，うすい痰の喀出が続くものに適する．香蘇散証よりもさらに胃腸が弱っていて，発熱はあっても微熱程度である．時に悪心，嘔吐，不安感，抑鬱傾向などの精神神経症状を伴うこともある．本方証の脈は沈弱である．

苓甘姜味辛夏仁湯は処方の組み立てからみると小青龍湯によく似ている．しかし小青龍湯のように桂枝麻黄が入っていないから表熱症状はない．即ち小青龍湯証に比べると表熱はなく，その代わりに裏寒と停水が著明なものである．つまり，小青龍湯と表裏をなすものと思えばよい．苓甘姜味辛夏仁湯証の特徴は激しい咳が出るところにある．咳は湿性で，痰は薄く量は多い．貧血に傾き，咳込んでも麦門冬湯のように顔が赤くなることは少ない．脈は原則的に沈であるが，沈弱のこともある．決して小青龍湯証のように浮にはならない．

麦門冬湯も強い咳で顔を真赤にして激しく咳き込む傾向があり，さらに空咳のために咽が苦しく乾くような感じを伴うものに投与する．麦門冬湯を記載した原典の金匱要略には大逆上気，咽喉不利とある．咳き込むのが大逆上気であり，咽の通利が悪くなるような感じが咽喉不利である．痰は出ても薄く量も少ない．小陥胸湯証のように痰が切れないために強い咳が出るのではなく，咳そのものが強いのである．苓甘姜味辛夏仁湯証では湿った咳で，麦門冬湯証では乾いた咳である．同じ強い咳，咳き込むものにも処方を使い分ける必要がある．なお脈の上でも苓甘姜味辛夏仁湯証では沈，麦門冬湯証では浮のことが多い．

半夏厚朴湯も咽喉部の異常感を伴うものに適する．咽喉不利という点では麦門冬湯証と似ているが，麦門冬湯の証では乾燥して筋痙攣状態であるのに対して半夏厚朴湯の証では湿性で知覚障害状態の点が根本的に違う．半夏厚朴湯の証では恐らく咽喉の準浮腫状態があるものといえる．自覚的には咽がくすぐったい，いらいらする，狭くなっ

たような感じ，何か引懸かっているような感じなどがして，その刺激によって咳が出るという場合に半夏厚朴湯を使う．強い咳は出ずに時々思い出したように軽い咳が出る．痰は薄く量は決まっていない．半夏厚朴湯証は全体的に虚証で沈鬱型だから元気がないが，時に反対に非常に気が早く，気の方が進みすぎて思うようになれずにいらいらするようなこともある．一体に貧血に傾き，脈は沈か沈弱である．

3．その他

感冒でなかなか抜けきらないというものに対して風邪だからといって漫然と葛根湯などを使うのは愚の骨頂である．こういうものは虚に陥っているか寒があるかで沈滞しているのであるから，実証で熱をもつものに使う葛根湯を用いるべきではない．

発病後4，5日たってまだ頭痛や関節が痛み食欲もなくなってきたというものには，柴胡桂枝湯が適する．さらに全体に虚しているかあるいは長く経過してもう頭痛も体の痛みもなくなったにもかかわらずさっぱりしないものには柴胡桂枝乾姜湯を使うことが多い．このように，感冒が長引くものには柴胡剤が適することが多いのである．

胃腸障害が主症状になっていれば，この症状の治療をするとよくなる．小児などで食べ過ぎて風邪が治りにくいというものがある点にも注意するとよい．そういう時には胃がもたれていたら生姜瀉心湯，便秘して下舌が赤くなっているようなら調胃承気湯，微熱があれば枳実梔子湯が適する．

冷え性の人で寒さが続くような時にはなかなか風邪が抜けきらず，風邪を引きなおすこともあるから温かくして過労を慎むように注意を促すことも大切である．処方は朮附湯がよい．頭痛や寒気が残っていれば麻黄附子細辛湯，全体的に元気がなければ真武湯を考えるべきである．

夏の感冒は治りにくいといわれている．それは汗が多くなる夏においては，漢方医学的にみると表が虚している状態であることが多いからである．前述の防已黄耆湯が適することが多い．もし汗がだらだらと出ているようなら実証には桂枝二麻黄一湯，虚証には桂枝加附子湯がよい．また，この季節には飲料水や冷たいものを多く摂るので五苓散を使うことがある．五苓散証では，必ず口渇，尿利減少を伴っているし，下利することもある．

小児において全身症状が主体の場合，体質が実証のことが多いため麻黄湯が選択される．しかし，虚実の判別が困難である場合には桂枝麻黄各半湯を使う．本方は麻黄湯を投与した場合にしばしば認められる脱汗現象を起こしにくく，比較的小児が喜んで飲める味をもつ．明らかな実証には麻黄湯，もし虚実の判別が困難な場合には桂枝麻黄各半湯と考えておけばよい．

各時期，諸タイプのものにそれぞれ投薬して治らなければ，証の掴み方が誤っているのである．以前に瀉剤を投与したのであれば今度は補剤を，温剤を投与したのであれば寒剤を，というように反対の治療を考慮した方がよいことがある．また例えば葛根湯を服用した後に項背部の緊張は改善したが咽が渇く，あるいは食欲が減退したなどというように証が変化する場合も同様に処方を変えてそれぞれの治療をしなければならない．

なお，麻黄はエフェドリンを含有し，交感神経刺激作用を有するため，麻黄を含む漢方薬の処方に際しては以下の点に留意されたい．1）虚血性心疾患，不整脈，高血圧症等の循環器疾患に対する投与には厳重な注意が必要である．2）交感神経刺激薬あるいは遮断薬，テオフィリン製剤等を併用する場合には，これらの薬剤を減量する，あるいは麻黄含有の漢方薬の投与を控える．3）虚証では不眠，興奮，動悸，発汗過多，尿閉，あるいは消化器症状などの副作用が現れやすいため，投与前に虚実の判別に注意する．

付録　処方集

本稿で述べた処方の用量，用法，漢方医学的解釈について説明する．用量は所要有効量の最低を採っており，必要があれば全体を50から100％増しにしても差し支えない．単位は固体ではグラム，液体ではミリリットルである．用法について指定のないものは常煎法とする．常煎法は，一日分につき水400で煮て200に煮詰め，滓をこして取去り，食前三回に分服するものとする．水半量の場合は，200の水で煮て100に煮詰めることとする．簡略法については便法として併記した．エキス製剤があるものについては，代用の項で製薬会社名を略記した．

葛根湯
用量：葛根４，麻黄３，生姜３，大棗３，桂枝２，芍薬２，甘草２
用法：水400で葛根，麻黄を煮て80を減じ320とし上に浮かんだ白沫を去り，他の諸薬を加えて再び煮て120に煮詰め，滓を去り３回に分服する．
証：表実熱して項背強ばり或いは限局性血鬱あるもの
代用：ツムラ，コタロー，カネボウ

甘草湯
用量：甘草２
用法：水120で煮て60に煮詰め２回に分服する．
証：咽痛
代用：カネボウ

甘草乾姜湯
用量：甘草４，乾姜２
用法：水230で煮て60に煮詰め２回に分服する．
証：足冷，咽中乾，鼻汁

甘草附子湯
用量：甘草２，附子0.6，白朮２，桂枝４
用法：水240で煮て120に煮詰め，滓を去り３回に分服する．
便法：水半量常煎法
証：表虚水，気上衝，骨節疼煩する，小便不利

桔梗湯
用量：桔梗１，甘草２
用法：水120で煮て40として２回に分服する．
便法：桔梗1.5，甘草３として水半量，常煎法
証：咽痛
代用：ツムラ

枳実梔子湯
用量：枳実２，梔子1.4，香蝼14
用法：水280を空煮して160とし，枳実，梔子を入れて煮て80に煮詰め，香蝼を加えて再び煮て５－６回沸騰させ，滓を去り，２回に分服する．
便法：水半量，常煎法
証：大病後労復，微熱，食欲不振

桂枝加黄耆湯
用量：桂枝３，芍薬３，大棗３，生姜３，甘草２，黄耆２
用法：水280で煮て，煮詰めて120とし滓を去り，３回に分服する．
便法：常煎法
証：身疼痛煩躁，小便不利

桂枝加葛根湯
用量：桂枝３，芍薬３，大棗３，生姜３，甘草２，葛根４
用法：水360で葛根を煮て80を減らし，他の諸薬を加えて再び煮て120に煮詰め３回に分服する．
便法：常煎法
証：葛根湯の虚証，表虚熱して項背強ばるもの

桂枝加厚朴杏仁湯
用量：桂枝３，芍薬３，大棗３，生姜３，甘草２，厚朴２，杏仁３
用法：水280で煮て120として３回に分服する．
便法：常煎法
証：虚証の表熱，喘咳

桂枝加附子湯
用量：桂枝３，芍薬３，大棗３，生姜３，甘草２，

附子0.3
証：脱汗による表虚津液欠乏

桂枝二麻黄一湯
用量：桂枝1.7，芍薬1.25，生姜1.25，大棗1.75，麻黄0.75，杏仁0.7，甘草1.1
用法：水200で麻黄を煮て１－２回沸騰させ上沫を去り，他の諸薬を入れて再び煮て80に煮詰め滓を去り，２回に分服する．
便法：桂枝３，大棗３，芍薬2.5，生姜３，麻黄1.5，杏仁1.5，甘草２で常煎法
証：大汗後瘧のごときもの

桂枝湯
用量：桂枝３，芍薬３，大棗３，生姜３，甘草２
用法：水280で煮て120として３回に分服する．
証：気血栄衛の不和による表虚熱或いは気上衝
代用：ツムラ，コタロー

桂枝二越婢一湯
用量：桂枝0.75，芍薬0.75，甘草0.75，麻黄0.75，生姜1.5，大棗１，石膏１
用法：水200で麻黄を煮て１－２回沸騰させ，上沫を去り他の諸薬を入れて再び煮て80に煮詰め，２回に分服する．
便法：桂枝２，芍薬２，甘草２，麻黄２，大棗2.5，石膏２，生姜4.5を常煎法
証：発熱多，悪寒少

桂枝人参湯
用量：桂枝４，甘草４，白朮３，人参３，乾姜３
用法：水360で桂枝以外の諸薬を煮て200とし，桂枝を入れて再び煮て120とし，滓を去り，日中２回夜１回に分服する．
便法：常煎法
証：表熱裏寒
代用：ツムラ，カネボウ

桂枝附子去桂加朮湯（白朮附子湯）
用量：附子0.9，白朮４，生姜３，大棗３，甘草２
用法：水240で煮て80に煮詰め３回に分服する．
証：表虚，停水して身体疼煩し，気水小便に従って泄れるもの

桂枝附子湯
用量：桂枝４，附子0.9，生姜３，大棗３，甘草２
用法：水280で煮て120とし３回に分服する．
便法：常煎法
証：表虚，停水して身体疼煩する

桂枝麻黄各半湯
用量：桂枝1.7，芍薬１，生姜１，甘草１，麻黄１，大棗１，杏仁１
用法：水200で麻黄を煮て１－２回沸騰させ，上沫を去り，他の諸薬を入れて再び煮て70に煮詰め３回に分服する．
便法：桂枝３，芍薬２，甘草２，麻黄２，大棗２，杏仁２，生姜３を常煎法
証：発汗難，赤顔

香蘇散
用量：蘇葉４，香附子６，陳皮６，甘草１，生姜３，葱若干
証：表虚寒，胃腸虚弱
代用：ツムラ

五苓散
用量：澤瀉５分，猪苓３分，茯苓３分，朮３分，桂枝２分の割合
用法：上記を細末とし，１回２を１日３回重湯に混ぜて服用する．
便法：五苓散５，重湯末１を混合し３回に分服する．
証：胃内停水，気上衝，表証
代用：ツムラ，コタロー，カネボウ

柴胡桂枝乾姜湯
用量：柴胡８，桂枝３，瓜呂恨４，黄芩３，牡蛎３，乾姜２，甘草２
用法：水480で煮て240に煮詰め，滓を去り，再び煮て120に煮詰め３回に分服する．
便法：常煎法

証：胸脇微実，表熱裏寒，津液不足，気上衝
代用：ツムラ，コタロー

柴胡桂枝湯
用量：柴胡４，半夏４，桂枝1.5，黄芩1.5，人参1.5，芍薬1.5，生姜1.5，大棗1.5，甘草１
用法：水280で煮て120とし，３回に分服する．
便法：常煎法
証：小柴胡湯証にして表証を兼ねる
代用：ツムラ，コタロー，カネボウ

四逆湯
用量：甘草２，乾姜1.5，附子0.3
用法：水120で煮て50に煮詰め２回に分服する．
便法：甘草３，乾姜２，附子１で水半量常煎法
証：裏虚寒，或いは表寒，あるいは表仮熱

朮附湯
用量：附子1.35，白朮６，生姜4.5，大棗4.5，甘草３（白朮附子湯の1.5倍）
用法：水600で煮て210として３回に分服する．
証：表虚，停水，身体疼煩，頭重眩苦

小陥胸湯
用量：黄連１，瓜呂仁４，半夏８
用法：水240で瓜呂仁を煮て120に煮詰め，他の諸薬を入れ，再び煮て80に煮詰め，３回に分服する．
便法：水半量で常煎法
証：心下部疼痛

生姜瀉心湯
用量：半夏８，黄芩３，乾姜１，人参３，甘草３，大棗３，黄連１，生姜４
用法：水400で煮て240に煮詰め，３回に分服する．
証：心下気痞，その気が停水を動かす

小柴胡湯
用量：柴胡８，半夏８，生姜３，黄芩３，大棗３，人参３，甘草３
用法：水480で煮て240に煮詰め，滓を去り，再び煮て120に煮詰め３回に分服する．
便法：常煎法
証：上部胸脇から中部心下に及ぶ実熱，熱による気上衝，停水
代用：ツムラ，コタロー，カネボウ

小青龍湯
用量：麻黄３，芍薬３，乾姜３，甘草３，桂枝３，細辛３，五味子３，半夏８
用法：水400で麻黄を煮て320に煮詰め，上沫を去り，他の諸薬を入れて再び煮て120に煮詰め３回に分服する．
便法：常煎法
証：溢飲，心下水寒，気上衝，表熱
代用：ツムラ，コタロー，カネボウ

参蘇飲
用量：蘇葉３，桔梗３，枳殻３，陳皮３，半夏３，茯苓３，前胡６，葛根６，人参２，甘草２，大棗２，木香1.5，生姜３
証：咳痰，嘔吐，気鬱
代用：ツムラ

真武湯
用量：茯苓３，芍薬３，生姜３，白朮２，附子0.3
用法：水320で煮て120に煮詰め３回に分服する．
便法：水半量で常煎法
証：裏水，中虚，気上衝，表証
代用：ツムラ，コタロー

大青龍湯
用量：麻黄６，杏仁5.5，桂枝２，生姜３，大棗３，甘草２，石膏12
用法：水360で麻黄を煮て260に煮詰め上沫を去り，他の諸薬を入れて再び煮て，120に煮詰め，滓を去り，３回に分服する．
便法：常煎法
証：表実，裏水浮泛するも外泄せず，熱で煩躁

調胃承気湯
用量：大黄４，芒硝８，甘草２
用法：水120で大黄，甘草を煮て40に煮詰め，滓を去り，芒硝を加えて再び煮て１－２回沸騰させ頓服する．

便法：水半量で常煎法，上記の量を３回に分服する．
証：胃気不和
代用：ツムラ

人参湯
用量：人参３，甘草３，白朮３，乾姜３
用法：水320で煮て120に煮詰め３回に分服する．
便法：水半量で常煎法
証：裏虚寒水
代用：ツムラ，コタロー，カネボウ

麦門冬湯
用量：麦門冬15，半夏10，粳米4.5，大棗３，人参２，甘草２
用法：水480で煮て240に煮詰め，日中３回夜１回に分服する．
便法：常煎法
証：気逆し咽喉に迫る
代用：ツムラ，コタロー，カネボウ

半夏苦酒湯
用量：半夏２，鶏卵１個，三倍酢
用法：卵殻中の内容を去り，その中へ半夏２を入れ，それに３倍に希釈した酢を加えて８分目に満たし，これを火上において沸騰させて半夏を去り半個分の卵白を加えて再び沸騰させ，冷後少しずつ含み飲む．
証：咽痛，咽中瘡

半夏厚朴湯
用量：半夏10，茯苓４，生姜５，厚朴３，蘇葉２
用法：水280で煮て160に煮詰め，日中３回夜１回に分服する．
便法：常煎法
証：胃内停水，咽胸中あるいは表に気痞する
代用：ツムラ，コタロー，カネボウ

半夏湯
用量：半夏，桂枝，甘草各等分
用法：粉末として１回２を沸湯40の中へ入れ少し煮て火から下ろし冷やして服用する．１日３回服用する．
便法：半夏８，桂枝４，甘草４を水半量で常煎法
証：咽痛，頭痛

白朮附子湯（桂枝附子去桂加朮湯）
用量：附子0.9，白朮４，生姜３，大棗３，甘草２
用法：水240で煮て80に煮詰め，３回に分服する．
便法：水半量で常煎法
証：表虚，停水して身体疼煩し，気水小便に従って泄れるもの

附子湯
用量：附子0.6，茯苓３，芍薬３，白朮４，人参２
用法：水320で煮て120に煮詰め，３回に分服する．
便法：水半量で常煎法
証：身骨関節痛，背部悪寒，手身冷，寒性煩躁

防已黄耆湯
用量：防已１，黄耆1.1，朮0.8，生姜0.8，大棗0.8，甘草0.5
用法：生姜，大棗以外の諸薬をカットして混合したもの5.0に生姜，大棗を加えて，水240で煮て80に煮詰め，滓を去り，２回に分服する．
便法：防已４，甘草２，朮３，黄耆4.5，大棗３，生姜３を常煎法
証：身重，汗出，悪風
代用：ツムラ，コタロー，カネボウ

麻黄加朮湯
用量：麻黄３，杏仁３，桂枝２，甘草２，朮４
用法：水360で麻黄を煮て280に煮詰め，他の諸薬を入れて再び煮て，100に煮詰め，３回に分服する．
便法：常煎法
証：身煩疼，頭痛鼻塞

麻黄甘草附子湯
用量：麻黄２，甘草２，附子0.3
用法：水280で麻黄を煮て，１－２回沸騰させ上沫を去り，他の諸薬を入れて再び煮て120に煮詰

めて３回に分服する．
便法：麻黄３，甘草２，附子１を水半量で常煎法
証：表虚，頭痛身疼軽きもの

麻黄湯
用量：麻黄３，杏仁４，桂枝２，甘草１
用法：水360で麻黄を煮て260に煮詰め上沫を去り，他の諸薬を入れて再び煮て100に煮詰めて３回に分服する．
便法：水半量で常煎法
証：表実熱，表および上部の停水動揺
代用：ツムラ，コタロー，カネボウ

麻黄附子細辛湯
用量：麻黄２，細辛２，附子0.3
用法：水400で麻黄を煮て320に煮詰め上沫を去り，他の諸薬を入れて再び煮て120に煮詰めて３回に分服する．
便法：水半量で常煎法
証：表寒反って発熱するもの
代用：ツムラ，コタロー

苓甘姜味辛夏仁湯
用量：茯苓４，半夏５，杏仁３，五味子３，甘草３，乾姜３，細辛３
用法：水400で煮て120に煮詰め，１回20ずつ１日３回服用する．
便法：水半量で常煎法
証：痰飲浮腫
代用：ツムラ，コタロー

文　献

1）西村　甲．漢方医学概論．浜松赤十字病院医学雑誌　2001；2：4-33.
2）龍野一雄．増補改訂　漢方入門講座．東京：中国漢方；1956.
3）龍野一雄．漢方医学大系．京都：雄渾社；1978.
4）藤平　健，小倉重成．漢方概論．大阪：創元社；1979.
5）菊谷豊彦．医療用漢方製剤の用い方　保険診療から合法・併用まで．東京：南山堂；1996.
6）日本漢方医学研究所編．新版漢方医学．東京：日本漢方医学研究所；1990.
7）熊谷　朗監修．大塚恭男，鍋谷欣市ほか編集．現代の漢方療法．市川：東洋学術出版社；1985.
8）桑木崇秀．新版健保適応エキス剤による漢方診療ハンドブック．大阪：創元社；1995.
9）矢数道明．臨床応用　漢方処方解説．大阪：創元社；1981.
10）広瀬滋之．かぜ症候群と漢方．日本小児東洋医学会誌　2001；17：26-29.